
あめ

楓桜

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あめ

【Nコード】

N8988B

【作者名】

楓桜

【あらすじ】

ざあざあとし降り注ぐ雨の中、彼女と出会った。彼女はどこか儚げで、美しく、そして何かが違っていた。

雨の中

彼女を見かけたのは、雨の降りしきる少し肌寒い日だった。

会社から帰り、自分の住むマンションに入るうとした時、俊也はマンションの前に佇む彼女を見つけた。

まだ幼さを残す、十代後半だろう少女が、そこにいた。

いつからいたのだろう、彼女は傘も持たずにざあざあと振り続ける雨の中、道の真ん中に立ち、身動きもせずに空を見上げていた。

彼女の着るونسリーブのワンピースも、ゆるくウェーブのかかった長い栗色の髪も、彼女自身もぐつしよりと雨に濡れている。

雨に濡れる彼女の姿は美しく、けれどとても儚く見えた。今にも消えていなくなってしまうのではないかと思うほど彼女の存在は希薄で、しかしその儚さがかけがえのないもののように感じた。

今に倒れてもおかしくない華奢な体が俊也の目に映る。

まるで人間ではない、別の世界の生き物のようだ。

彼女と俊也の間に見えない壁があり、彼女の周りだけが別の世界になっているのではないかとさえ思う。

きっと死ぬ瞬間も美しいのだろう。そう思ってしまうほど彼女の存在は希薄で、美しい。

俊也は我を忘れて彼女を見つめた。

雨音も、近くを走る車の音も、すべて彼の耳には届かなかった。

まるで世界に彼女と二人だけになってしまったかのような錯覚を覚える。

視界に映るのは、人間味を帯びない美しい彼女と、そしてしきりに彼女に振り落ちる雨だけ。

ずっと彼女を見つめていたい。

彼女がその場で死んでしまうまでその姿を見ていたい。

そして。

突然彼女はその場で倒れた。

がくん、とひざを折り、物音も立てずに彼女はアスファルトの上に崩れ落ち、そのまま、身じろぎもしない。

まるで糸が切れてしまった操り人形のように、細長い手足を投げ出している。

ざああ…

雨は彼女に、俊也に、二人の周りのすべてに平等に、容赦なく降り注ぐ。

これが、彼女との初めての出会いだった。

救出

俺は一体何をしているんだ？！

どうして俺がこんなことをしているんだ？！

なぜ俺は見ず知らずの少女を急いで担いで自宅に運んでいるんだ？！

俊也は非常に混乱していた。

自宅のマンションの前で土砂降りの雨の中傘も差さずにぼんやり突っ立っていた少女が、俊也の見ている前で突然倒れた。駆け寄ってみると微かに意識はあるようで、けれど自分の力では立ち上がれないようだった。

普通なら救急車を呼ぶだろう。車に轢かれないように道の端に運んだっておかしくない。けれど俊也はそうしなかった。

なぜそうしたのは分らない。俊也は倒れた少女を担ぎ上げると、一目散に自宅へと走っていったのだ。

少女の体は驚くほど軽く、そして冷え切っていた。まだ肌寒いこの天気の中、薄手のノンスリーブのワンピースなんて着ているから冷えていて当然だ。しかも体中に雨が浸み込んでいる。

いつもならのんびりと上る階段を俊也は少女を抱えて駆け上り、慌てて鍵をポケットから取り出すと、足早に部屋に入って行った。

少女を担いだまま浴室に直行し浴槽の中に少女をそつと下ろした。浴槽のふちに少女の両腕をかけさせ体が倒れないような体制をとらせると、俊也は迷わずシャワーのノズルからお湯を出し、彼女の首筋にお湯をかけ始める。もくもくと湯気を出しながら、温かいその液体は少女の体を流れ落ちて行き、彼女の体を徐々に温めていった。まるで死人のように動かなかった少女の指が、体を温めるお湯に反応したのかぴくりと動き、そして恐ろしく緩慢な動きで浴槽のふちに預けていた頭を起こした。今更俊也の存在に気付いたようだ。

「！」

彼女に見つめられ、俊也は思わず言葉を失った。

彼女の表情は雨に濡れながら道端に立っていたあの時と同じで、少しでも刺激を与えたらいなくなってしまうようなほど儚く、人間ではないのではないかと思ってしまうほど美しかった。

顔の造形ではない、何か別の美しさだ。オーラ、というのだろうか。神聖で、それでいて希薄で、触れただけで崩れてしまいそうな存在。それだけもろいからこそ生まれる美しさを彼女は持っていた。しばらく彼女も俊也も見つめあったまま動かなかった。ざああ、とお湯の流れ落ちる音が妙に耳障りで、それ以外の音は何もしない体が縛られたように動かない。動いたら何もかもがなくなってしまうような、そんな気がして仕方がない。

だが、当然だが彼女は消えもしないし崩れもせず、それどころかのろのろと立ち上がった。

何をするのだろう、と俊也が見守る前で彼女はワンピースの裾を弱々しく掴むと突然脱ぎ始め、俊也はぎょつとして後ずさった。

「うわっ？！ちょ、ちよつと待って！！」

予想外の少女の行動に驚き、俊也は慌ててシャワーのノズルを手放すと浴室から飛び出し、浴室の戸を勢いよく閉めた。

心臓がばくばくと鼓動しているのが分かる。

あの程度で動揺するなんて情けない、相手はたかだか高校生かこちらの少女じゃないか。

そう自分に言い聞かせるが、心臓の動きはしばらく落ち着きそうにない。

浴室からは彼女がシャワーを浴びているのだろう、お湯の流れ落ちる音が聞こえてくる。自力でシャワーを浴びることが出来るようだ。とにかく着替えを持って来ようと、俊也は寝室に向かうことにした。彼女の服は当分着れそうにない。サイズは合わなくても着るものが必要だ。

だが廊下に出て、寝室に向かおうとした時だった。がたん、と浴室の方から何かが倒れる音がした。

弾かれたように俊也は浴室に戻り浴室の戸を開けると、そこには裸で倒れている少女の姿。

「おい、大丈夫か?!」

シャワーのお湯を止めてから少女を抱え浴室から出すと、俊也は彼女の体をバスタオルでくるみ、寝室へと向かった。

なぜ俺がこんなことをしているのだろう。

こんなことをせずに早く病院に連れて行ったほうがいいんじゃないか。

そんな思いとは全く逆の行動をしている自分が不思議でしようがない。

だが俊也はそんな思いとは真逆の行動をとらずにはいらなかった。なぜだか分からない。体が勝手に動いてしまうのだ。ただ、俊也にも分からない自分の中の何かが俊也を突き動かしていた。

それから俊也は彼女の体の水分をざっとふき取ると寝室のベッドに寝かせ、布団をかけた。まだ肌寒い季節とはいえ室内は暖房なしでも過ごせるが、彼女の体が冷えてしまわないようにエアコンのスイッチをオンにする。

そこまでしたら、あとは何もすることがなくなった。あとは彼女が目覚めますまで待つだけだ。

ちゃんと目覚めるだろうか。ここで死んでしまったりしないだろうか。むしろもう死んでしまっていたりして。

急に不安になって、俊也は恐る恐る彼女の顔を覗き見た。

彼女にかかっている布団が微かに上下している。息はしているようだ。

「はあ、とりあえず生きてる」

俊也は胸を撫で下ろし、とにかく着替えることにした。まだ比較的新しい背広がびしょぬれだ。

とにかく様子を見ることにしよう。そう決めると、俊也は着替えを持って寝室を後にした。

外泊

あれから一時間くらい経っただろうか。

彼女を寝室に寝かせてから自分も風呂に入り、浴槽のふちにぞんざいにかけられていた彼女のワンピースを洗濯して俊也の背広の隣に干し、着替えたはいいもののなんだか落ち着かない。いつもなら夕飯の準備をしたりテレビを見たりパソコンをいじったり酒を飲んだりと気ままに過ごすのに、今日は何も手に付かない。

リビングをぐるっと一周してしまったり、ソファに立ったり座ったりとどうも異常な行動をとってしまう。

結局落ち着く間もなくあっという間に一時間経過してしまったところで、とにかく彼女の様子を見てこよう、という結論に至った。

もうそろそろ目が覚めるかもしれない。そう思い寝室のドアを開け部屋に入った俊也は、思わず息を呑んだ。

彼女は既に目を覚ましていた。

上半身を起こし、まだ半分意識がないのか目を半分だけ開けて部屋の壁をまっすぐ見つめている。

なんだかその光景が、まるで一つの絵のように思えた。いつもの見慣れた寝室も、ベッドも、壁もカーテンも、彼女がいるだけで神聖なもののように感じてしまう。

彼女の持つ空気は明らかに異質で、自分なんか足を踏み入れてはいけない世界がそこにはあった。

ふと、彼女は俊也の方に目を向けた。

どきり、と胸が高鳴る。

長い間、彼女は俊也を見つめた。

何を考えているのだろうか。彼女に表情はなく、その顔からは様子が見えない。

が、突然彼女はにやり、と笑みを浮かべた。

「えっ……？」

彼女の表情が変わったとたん、空気が変わった。

それまでの彼女の持つ異質な空気が消え、彼女は普通の女の子の空気をまとい俊也に話しかけた。

「この部屋、いいね。私気に入った！」

「…はあ」

第一声がまずよく分らない。

普通はもうちょっと、ここはどこか、あなた誰とか、もしくは助けてくれてありがとうとか、予想しうる言葉が出てくるものなのではないだろうか。

この部屋いいね…って。どこからそんな言葉が思い浮かぶのだろう。

だが彼女は俊也の心境など全く気にしない様子で、更に驚く言葉を吐いたのだ。

「決めた！今日ここに泊まるーっ」と

「なんだって?!」

「ということで、不束者ですがよろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします……っておいちよっと待った！」

「え、何？」

きよとん、と彼女は首をかしげた。完全に普通の女の子の仕草だ。さっきまでの神がかり的な儚さなど微塵も感じられない。

なんだこの変わりようは、と俊也は彼女をまじまじと見つめて、それからはっとして彼女から目を背けた。彼女はまだ裸のままだった。布団で体は隠れているが、じろじろと見つめるわけにはいいかない。

「とにかく、こんなんしかないけど着とけ」

なるべく彼女の方を見ないように注意しながら俊也は用意しておいたＴシャツと短パンを彼女の方に放った。

「あ、ありがとう」

自分が裸であることに對して何も気にならないのか、彼女の声からは動揺は感じられない。むしろ俊也の方が動揺している。

背後で彼女が着替える衣擦れの音がして、そして着終わった気配がすると、俊也は背後の少女に声をかけた。

「着替え終わったか？」

「うん、でも…」

「どうした」

「パンツがなくて気持ち悪い」

「っ！」

恥じらいの様子もなくそう言つてのける彼女の言葉に、俊也の方が恥ずかしくなつてしまふ。きつと顔が赤くなっているのだろう、全身が熱くていやな汗が出てくる。

「あなたの下着でいーから貸して？」

「ば、ばか言ふな！我慢しろ！」

ついでもつてしまふ自分が情けない。

とにかく落ち着かなければ、と俊也は息を吐き出し、そして彼女の方に向き直つた。

思ったとおり、俊也の服は小柄な彼女では大きすぎるようだった。ベッドの上にちょこんと座る彼女が大きすぎる服のせいで更に小さく見えてしまふ。

「それ以上小さい服がないから我慢しろよ」

「うーん、それはいいけどパンツが…」

「パンツは諦めろ！」

「はい」

顔を真っ赤にする俊也を見て彼女はくすくすと笑つた。

年下の女の子に笑われるなんて情けないと自分自身に呆れつつ、気を落ち着かせるために俊也はごほん、と咳払いをすると両手を腰にやってベッドの上の少女を見下ろした。

「もう体調はいいのか？そもそもなんで倒れたんだ君は？」

「うーん…」

俊也に問われ、彼女は首を傾げて考えるそぶりを見せた。

「たぶん三日間何も食べなかったからかも」

「三日?!なんでそんなこと...!ちょっと待ってろ、今なんか持ってくるから!」

俊也は急いで寝室を出ると、リビングに向かった。確か帰りがけにコンビニで買ったパンがあったはずだ。

リビングのテーブルにおいてあるパンを見つけると、俊也は急いでそれを取り寝室に戻った。

寝室のベッドの上では、少女がかわいらしく体育座りをしていて、俊也が戻ってきたことに気がつくのと首を傾げて俊也を見つめる。そんな少女の鼻先に、俊也は持っているパンを突きつけた。

「今これしか食べるものないからとりあえずこれ食べてる。すぐ夕飯作ってやるから」

ぱちぱち、と大きな目で何回か瞬きをした後、彼女はにっこりと笑ってパンを受け取った。そのパンを受け取る手も、手首も驚くほど細い。かわいそうに、きつと何か事情があつて普段からあまり食べる事が出来ない環境にあるのかもしれない。

「ありがとう。でもこれだけで十分だから、何も作らなくて大丈夫だよ!」

「若い女の子が遠慮するな。今作ってくるから」

「いい!いらないよ。このパンだけで十分だから」

少女はパンの包みを開けると、少しずつかじり始めた。

どうしたものかと逡巡した俊也だが、諦めたようにベッドに腰掛けると、少女がパンを食べるのを見守った。

それほど大きいパンでもないのに、減り方が恐ろしく遅い。彼女の一口が本当に小さいからだ。まるで小鳥が食べているようだ。

半分も食べきらないうちに、彼女は食べることをやめて残りのパンを俊也に差し出した。

「もういいや、これ以上食べられない」

「そんなわけないだろ、三日も食べてないのに」

「うーん...」

困ったように眉根を寄せる少女の表情は、とてもかわいらしく、

雨に濡れていた時のあの面影など微塵も感じられない。一体どうしたらこんなに豹変できるのだろうと不思議に思いつつ彼女を見つめる俊也に向かつて、彼女はやりといたずらっぽい笑みを浮かべた。

「私のお願ひ聞いてくれたらもうちょっと食べる」

「なんだ？」

「私を今日ここに泊めて！」

「あのなあ、なんで俺が素性の知れない君を泊めなきゃいけないんだ？」

と言いつつも、ここでぞんざいにこの少女を追いつ出すことも出来ないことに俊也は気付いた。家に彼女をつれてきたのは紛れもなく俊也自身なのだ。自分で自宅に連れてきておいて今更出て行けだなんて言える立場ではない。

それにもしここを無理に追い出したとして、このまま飢え死にされてしまったら後味が悪い。

今更ながら自分の行動の無責任さに気が付き、俊也は後悔した。

けれどそんな俊也の心境などお構いなしに、少女は急に体勢を体育座りから正座に直し俊也をまっすぐ見つめたと思っただら、まくし立てるように自己紹介をし始めた。

「小川春菜、17歳。聖蘭女子学園高等学校2年生……」

それ以降住所や生年月日、趣味特技やらをひとしきり俊也に伝え終えると、につこりと笑顔でこう言った。

「もう素性の知れない仲じゃないでしょ？これで心置きなく泊めることができるよ」

「……」

彼女の勢いにやられ、俊也は反論する気力さえ失った。

一日くらいなら別に害もないだろう。何か悪いことをするようにも見えないし、なにより無理に追いつ出すことの出来る状況ではない。

俊也は了承の代わりに大きいため息をついた。

「とにかく、夕飯作ってくるわ。腹がへって仕方がない」

「ねえ」

「なんだ？」

「名前、教えてよ」

「藤堂俊也、24歳。サラリーマン……」

そこまでの義理はないとは思ったが、春菜がしたように一応俊也も自己紹介を簡潔に行った。

「俊也って呼んでいい？」

「藤堂さんと呼びなさい」

「えー？」

不満そうに頬を膨らます春菜を尻目に、俊也は夕飯を作るために寝室を後にした。

一応彼女の分の夕飯も作ってはみたが、春菜は申し訳程度に食べた後すぐに食えることを拒否した。

食えるという行為が嫌いなのだと彼女は言う。

嫌がる女の子に無理やり食べさせるのも抵抗があつたので春菜の好きにさせた。

食事を終えた頃にはもう夜の十時を越えていた。いつもならこれからのんびりと好きなことをする時間帯だが、俊也はぐったりと疲れていてそんな気分にはならなかった。

それも当然だ。恐ろしく軽いとはいえ人一人を担いだり面倒を見たり、普段なら絶対しないようなことをしたのだ。疲れていて不思議はない。

「俺はそろそろ寝るから、お前も寝ろ。じゃあな」

寝室のベッドの上にぺたんこ腰を下ろしている春菜に言うと、俊也はリビングのソファで寝るために寝室を出ようとしたが、春菜は何を考えているのか信じられない言葉を俊也に投げかけた。

「一緒に寝ようよ」

「なっ、何ばかなこと言っただお前？！」

予想外の彼女の言葉に俊也はまた体が熱くなるのを感じた。

もつといい大人が今日初めて会ったばかりの女子高生と同じベッドで寝れるはずがない。俊也が良識のある人間でなければ間違いなく

この少女は痛い目に遭っているだろう。

それとも、俊也と会う前からこの子は他の男の家に泊まり歩いてはこんな風に誘っているのだろうか。

そう考えると戸惑いや羞恥よりも、無防備すぎるこの少女に俊也は怒りを覚えた。見ず知らずの他人だ、彼女が何をしようといちいち怒る必要もないのだが無性に腹が立って仕方がない。

「俺はお前に恩着せがましくするつもりはないから、お前は遠慮せずにベッドを使っていい。俺はリビングで寝る」

なんとか怒鳴ってしまわぬよう怒りを抑え、ようやくそれだけ言ううと寝室のドアノブに手をかけた。

「えーやだ！一緒に寝ようよトードーさん……ぎゃっ！！」

駄々をこねた子供のように唇をすばめ、春菜は俊也の気持ちを知ってか知らずかベッドからおりて俊也の下に駆け寄ろうと試みた。けれど足元がふらつきうまく歩けなかったようで、彼女はフローリングで勢いよくこけて俊也をぎよっとさせた。

「えーん、痛いー」

「ったく、何してんだお前は?!」

呆れた様子で俊也は立ち上がるうとしない春菜をひよいとすくい上げると、ベッドに寝かせて布団をかけてやった。

そして春菜から離れようと彼女に背を向けてドアに向かって歩こうとした時、服の裾が引つ張られたような気がして、俊也はため息をついて顔だけ振り向いた。

俊也の服の裾を春菜はしっかりと握っていた。無言で責めてくる俊也の目をいとも簡単に見つめ返し、それどころかとびきりかわいらしく微笑んで見せる。

「離せこら」

「いや。一緒に寝よ」

「……」

腹の底からじわじわと怒りが沸いてくる。なぜだかは分からないが、押さえようもないほどの怒りの波が押し寄せてくる。

彼女が無防備ににこにこ笑っているから？それとも馬鹿にされている気がするから？

分らない。ただ無性に腹が立つ。

急に俊也はベッドに仰向けになっっている春菜の上にまたがると、少し乱暴に春菜の着るシャツにの胸倉を掴んだ。

突然の行動に春菜の笑顔が消えた。けれど怖がる様子はなく、まっすぐ、ただまっすぐと自分の上の俊也を見つめている。

「このままやられても、お前文句言えないんだぞ」

「……」

彼女の胸倉を掴む俊也の拳が怒りで震える。

こんなにも怒るのは久しぶりだ。怒りのせいで眩暈さえ覚える。

「お前がどこでどの男の家に泊まろうが勝手だけど、痛い思いするのはお前だけなんだからな」

低く、うなるような俊也の声。自分でもこんな声が出るだなんて知らなかった。

「もっと自分を大切にしろよ。飯にしても寝るにしても、自分を痛めつけるな」

「……」

しばらく春菜は無表情で俊也の目を見つめていた。

強い怒りに満ちた、俊也の目。

それを迷うことなくじつと見つめ、春菜は不意に口を開いた。

「……どんなことをされても、私の心は自由なの」

春菜の声色が、急に変わった。

先ほどまでの、普通の女の子のような話しかたとはまるで違う。

俊也は春菜の様子に驚いて言葉を失った。

まただ。雨に打たれていた時の、あの儚く美しい彼女になっっている。

彼女のまとう空気はあまりにも神聖で、もろくて、今にも消えていなくなってしまうようだ。そんな彼女を目の当たりにし、俊也は身動きが取れなくなってしまった。

春菜の胸倉を掴む俊也の手を、春菜はそつと両手で包み込む。冷たくて、とても小さい彼女の両手。力のこもっていないその手を振り払ったら最後、彼女は二度と姿を現さないのではないかとさえ思うほど、彼女の存在は希薄で、それでいて美しい。

彼女は言葉を失ってしまった俊也に構わず言葉を続けた。

「殴られても強姦されても、たとえ殺されても、私の心は何者にも捕らわれたりはしない」

しばらく二人はお互いの目を見つめ合った。

俊也は春菜の上にまたがったまま、そして彼女の胸倉を掴んだまま、そしてその手を春菜は両手で包み込んだまま、二人とも動かず、何も言わず、時が静止してしまっただかのようなうだ。

その状態のままどのくらい経っただろうか。実際は数十秒しか経っていないのかも知れないが、俊也には数時間経ったような気がした。

ふいに、春菜がにつこりと笑って見せたとなん、彼女はまた普通の女の子に戻った。それを確認し、俊也は内心安堵する。

「と、いうことで、一緒に寝るの決定」

「勝手に決めんな！」

春菜から離れ、ベッドに降りた俊也の手をぎゅっと握り締めて必死に春菜は俊也に話しかけた。

「いいでしょ？ 私別にいろんなところ泊まり歩いてるわけじゃないよ！ トードーさんなら変なことしないって分かっているから一緒に寝たいんだもん！」

「そんなの分からないだろ！ そうやって人を見た目で判断するな！ まともそうに見える奴でも危ないことしてくる奴もいるんだぞ」

「じゃあトードーさんも私のこと襲うの？」

「…俺はそんなことしないけど…」

「えー、ホントかなあ？ 俺はしないって言うてる人に限って変なこととしてきたりして…」

突然疑わしい目で春菜に見つめられ、俊也は思わずむきになって

反論した。

「俺は本当に何もしねえよ！」

「じゃあ今夜一緒に寝てそれを証明してよ」

「お、おう。望むところだ！………はっ！！」

にやり、と春菜が意地悪い笑みを浮かべるのを見て、俊也はがっくりとうなだれた。

つい乗せられてしまった。こんな女子高生に乗せられるなんて情けない。大の大人がこんな口車に乗せられるだなんてみつともない。俊也は自己嫌悪になりでかいたため息をつく、無防備ににこにこ笑ってベッドに入るように催促する春菜を見つめ、諦めてベッドに乗った。

「くそ、こうなりやケだ！！どうなっても知らないからな」

「トードーさんなら…私の初めて、あげてもいいよ…？」

わざとらしくもじもじと身をよじり、顔を赤らめ照れくさそうにこちらを見てくる春菜に俊也は内心どきりとしながらも一蹴した。

「変な声色使うな！！おら寝るぞ、布団にもぐれ！」

「あはは、トードーさん顔赤いよ？」

「黙れ！」

完全に面白がられている。

俊也は部屋の電気を消すと、なるべく春菜から離れたい一心でベッドの端に寄り、春菜に背を向けて目を閉じた。

とたん、部屋が静かになった。確かに俊也の背後には17歳の女の子が横になっている。けれどそれが夢だったのではないかと思ってしまうほど急に辺りが静かになり、俊也はなんだか不安になって背後の少女に声をかけてみた。

「おい…」

「なあに？」

すぐに返事が返ってきた。

なんだかほつとして、けれどなぜそんなことでほつとしたのか分からず、しかも声をかけておいて別に何を話したいわけでもなく、

俊也は困って話題を探した。

「あー…えっと、お前、雨の中傘も差さないで何してたんだ？」

「……」

返事がすぐに返ってこない。

聞いてはいけなかったのだろうか。

「別に言いたくなくや言わなくてもいいぞ？……っておい！」

言いながら慌てて俊也は寝返りを打ち春菜に向き直ったとたん、春菜が俊也の腕の中に潜り込んできた。ぎゅっと俊也の上着を掴み、そこから離れようとしない。

「おとなしく寝てろ！離れろってば」

「この方があったかいもん」こうやって寝るの！」

「…好きにしろ。ったく…」

この子に俊也の言うことを聞く意思はない。もう何を言っても無駄だと悟り、俊也は諦めて春菜のなすがままになった。

相手はまだ子供だというのに、動揺のせいか心臓がばくばくと鼓動している。きっと動揺していることも、俊也の胸に頭をくっつけている春菜にはばれているのだろう。

眠くなるどころか落ち着くことが出来ず、疲れているはずなのに眠れない。

困って俊也はどうしたものかと途方にくれていると、俊也の胸の中で身動きすらしなかった春菜がぼそりと呟いた。

「雨は、やさしく私を包んでくれるの」

「…え？」

「私のためな部分も、いやな部分も、全部全部包み込んでくれて、それで許してくれる。だから、雨が降ると外に出ずにはいられない」

「だから今日、外で雨に濡れたまま突っ立っていたのか？」

「うん、私、雨大好きなんだ…。トードーさんは、雨が好き？」

「雨ねえ…」

雨が好きだなんて、考えたこともなかった。

雨が降ると傘は邪魔だし着るものは濡れるし、じめじめしてうつ

とおしい。そうとしか思ったことがなかった。

雨が優しいだなんて、考えたこともなかった。

この子はしかし、雨を優しいと、自分を包み込んでくれる存在だと言う。

思いつきり雨を体中で受け止め、それを大好きと言う。

それは、一体どういう気持ちなのだろう、と俊也は思った。目を閉じて、ざあざあ振り続ける雨の中、傘を差さずに外に立つ自分を想像してみた。

ずぶ濡れになり、全身で雨を感じ、その自然の産物に身をゆだねる。

…それはそれで、いいかもしれない。

雨の中春菜と並んで、傘も差さずに外を歩く想像に身を任せながら、いつの間にか俊也は眠りに落ちていった。

朝目覚めると、春菜の姿はなかった。部屋に干しておいた彼女のワンピースも、俊也が貸した服もなくなっている。きっと学校にでも出かけたのだろう。

リビングにおいておいた昨夜春菜が残した食事が少しだけなくなっているのを見ると、俊也は微かに微笑んだ。

雨遊びの後

あれから当分、彼女に会うことはないだろうと俊也はふんでいた。別にそう予想することに理由はない。ただなんとなく、そんな気がしていた。

そもそも昨日のようなイレギュラーなことはそう頻繁に起こりうるはずがない。彼女は理由があつて俊也の自宅に来たわけでなく、ただ彼女が倒れた現場に居合わせたのが俊也だったというだけで、また彼女と会う理由が見当たらない。

昨日は特別だった。今日からはまたいつものとおりの一日が始まる。

…という俊也の予想は見事に外れた。

春菜はあの日からほぼ毎日俊也の自宅を訪ねて来たのだ。

来る日は大体自分の家には帰らずに学校から直行し、俊也が帰ってくるまで自宅の前でしゃがんで待機する。そして俊也が帰ってくると嬉々して彼に飛びつく、ということが日課になった。

最初は追いつ返そうと試みた俊也だったが、あまりにもそれがしよつちゅう続くので根負けし、そのうち春菜を家に泊めることが普通になってしまった。

自分でもおかしいと俊也は自覚している。

もともと何のつながりもない赤の他人だった少女とほぼ毎日会って、しかもそのつど家に泊めるなんて今まで夢にも思わなかった。そんなことが起こると思わなかったし、もしそんなことが起こったとしても自分が見知らぬ子を家に泊めるだなんて考えたこともなかった。

もしあの時倒れた少女が春菜ではなかったら、きっとこんなことにはならなかっただろうと俊也は思う。

あの雨の日、春菜をなぜ自宅に連れ帰ったのか、俊也は何度も考えた。

気が動転して判断力が欠けてしまったからなのかもしれないと俊也は思った。けれどそんな理由ではない。あの時は意外と冷静だった気がする。

そんなことではない。

あの雨の日、ずぶ濡れのまま空を見上げていた春菜を見かけた時、彼女に魅かれると同時に俊也はおかしな焦燥感に駆られた。

あのまま放っておいたら彼女がこの世からいなくなってしまうって、そしてもう二度とこの世界には戻れないような気がした。いなくなってしまう前に、どうしても手元においておきたかった。もし彼女がああ場で死んでしまったとしても手放したくないと心のどこかで思っていた。

もし俊也が彼女を突き放したとして、まさか彼女がこの世からいなくなるはずがないだろうからそんな心配はするだけ無駄だとは分かっているのだが、そんな気持ちに心に根を張り、どうしても消えそうにない。だから彼女を拒むことも出来ずにいるのだろう。

春菜と出会ってから、数週間が経っていた。

ぼつ、ぼつ…

昼間は晴れていた空を、雨雲がゆつくりと、しかし確実に覆っていった。雲は太陽からの光をさえぎり、地上を薄暗く染めていく。

ゆつくり、ゆつくり。雨雲は仲間を集め群れをなす。

夕方になると空はすっかり雨雲で覆われ、雨雲はついに雨粒を落としていった。

最初は少しだけ。そのうち激しく雨粒は地上に舞い降りていく。

町にも、人にも、すべてに平等に雨は落ちていった。

いつもと同じ会社からの帰り道、途中で買った傘を差しながら俊也は道を歩いていた。傘の下から空を見上げてみると、雨雲はがちりと守りを固め、青い空を見せてくれそうにない。

俊也は春菜の喜ぶ顔を思い浮かべた。

あの日から雨はさっぱり降らなかった。春菜は晴れ渡った空を窓から眺めてはため息をつき、雨の到来を心待ちにしていた。だから

きつと今頃喜んでいるに違いない。

今頃傘も差さず雨の中はしゃいでいるのかもしれない。もしくはまたあの日のように、何もせずに空をじっと見つめているのかもしれない。どちらにしても、きつと彼女は雨を存分に浴びているのだらうと俊也は予想した。

自宅のマンションまで戻り、見慣れた階段をのんびり上っていく。そして俊也の部屋の前に着くと、そこには予想外にもたたんだ傘を片手に持ち、落ち着かなさそうに外の雨を眺めているセーラー服姿の春菜の姿があった。

「なんだお前、雨降ってるのにじつとしてたのか？」

俊也が声をかけてみると、はっとして春菜がこちらに顔を向けた。彼女の様子はどこか切羽詰っているようで、落ち着きなくそわそわしている。

「遅い！！すごい遅いよトードーさん」

いつもと同じくらいの時間に帰ってきたにもかかわらず春菜は必死な様子でそういうと俊也に駆け寄った。

「ほら、早く着替えて外出るよ！ずっと待ってたんだから！！」

「一人で雨と遊んでれば良かっただろ、ってお前勝手に何してんだ！」

「かぎ…かぎ…！」

俊也が履いているスラックスのポケットに勝手に手をつ込み部屋の鍵を奪ったと思うと、春菜は部屋を開けて俊也を家の中へと急かした。

春菜に寝室まで追いやられ、言われるがままに俊也は背広を脱ぎ普段着に着替えることにした。

春菜もいそいそとリビングに駆けて行く。俊也の家に持ち込んだ私服を着ているのだらう。いつもののんびりでマイペースな春菜とはかけ離れている。

驚くほど早く着替え終わった春菜は、まだ着替えている途中の俊也の様子なんてお構いなしに俊也の腕を掴むと家の外に引っ張り出

した。

「ちよつと待て、俺傘家に置いたままだ」

部屋を出たところで春菜にそう言つと、今にもマンションを飛び出そうとしていた春菜は信じられないものを見るような目で振り返った。

「何を言つてるの?! 傘なんて不要よ!」

春菜の様子に俊也は圧倒され一歩後ずさつた。まるで飢えた獣のように目がぎらぎらとしている。

「そりやお前はそうかもしれないけど、俺は必要だよ」

「そんなのいらないつてば! さあレッツゴー」

「えっ?! お、おい待て...!」

ぎゅつと俊也の手を握つたかと思うと、ためらいもせず春菜は雨の中に飛び込んでいった。引つ張られて俊也も外に飛び出す。

外はすっかり暗くなり、雨が絶え間なく降っていた。

大粒の雨粒が容赦なく俊也を襲い、俊也の髪を、顔を、体を濡らしていく。

あつという間に体中に雨が浸透し、俊也はたまらず顔をしかめ、雨を恨めしく思った。

一方春菜の方はというと、空を見上げ、両腕をこれでもかというほど大きく広げ全身で雨を受け入れていた。楽しそうに笑い、くると踊るように回りながら全力で春菜は雨を楽しんでいる。

体が濡れることなんてまるで気にならないようだ。むしろ雨に濡れることがこの上ない喜びだといわんばかりに嬉々して何をするでもなく道を行ったり来たりしては何度も楽しそうに笑う。

そんな春菜の様子をみていると、濡れることを嫌がる自分がなんだか小さい人間のように思えてきた。

雨はうつとおしい。濡れるし、じめじめするし、いろいろと面倒くさい。

なのに彼女は俊也とは違い雨に濡れながら笑う。いつもよりも生き生きと、彼女は笑顔を絶やさず笑っている。

何が違ふのだろう。どうして彼女は雨を喜ぶのだろう。

雨の中異常なほどはしゃぐ春菜とは対照的に、俊也は雨に濡れながらじつと立ち尽くしたまま春菜の姿を見つめていた。雨が頭から顔に流れ落ちてくるために、しきりにそれを手で拭うがあまり意味がない。

何もしないでいる俊也にふと気付き、すっかりびしょ濡れになってしまった春菜がぱしゃぱしゃと雨水をはねさせながら俊也の下へと駆け寄ってきた。

「トードーさん、歩こう！」

いつも以上に元気に春菜は言いながら俊也の手をぎゅっと握り締める。

にこにこ微笑む春菜を見つめ、俊也は諦めて苦笑した。

子供のような春菜の笑顔を見ていると濡れることで不機嫌になる自分が馬鹿らしく思えてきた。

もうここまで濡れてしまったら仕方がない。こうなったら思いっきり濡れてやる。

「もうこうなりやヤケだな」

「よし、競争だ！！」

「お前今歩こうって行っただろがおい待て！」

俊也の言葉も聞かずに春菜は脱兎のごとく雨の降る道を走り出した。しかたなく俊也も春菜を追いかける。

最初の瞬発力はあったが、普段からろくに食べない春菜が長時間走れるわけもなくすぐに俊也は春菜に追いついた。

あまり長い距離を走っていないにもかかわらず春菜は息を切らし、立ち止まった。息を弾ませながらも楽しそうにけらけらと笑い、ぐつしよりと雨を飲み込んだ長い髪の毛を無造作にかきあげる。

「あはは、歩こうトードーさん！もうだめだ、疲れた」

「全然走ってねーじゃねーか」

「いーのいーの。よし、しゅっぱーっ！」

二人は雨の中町中を歩き回った。

小さな公園。見慣れた商店街。民家が並ぶ道。殆どが見慣れた場所だが、よく知った光景も雨が降っているとまるで違う。

すべてが洗い流される。水溜りの出来た道も、雨を含んだ木々や水が滴る建物もすべて。

雨の日に外をこんな風に歩いたことのない俊也にはすべてが新鮮に映った。

濡れることがうつとおしいなんてとんでもない。すべてが雨に濡れる光景がこんなに美しく、心惹かれるものだとは知らなかった。

雨は何も干渉しない。あるものすべてを濡らし、流していく。

俊也は歩きながら隣にいる春菜の顔を盗み見た。普段は見せない嬉しそうな笑顔。

この子はいつもと違うこの光景を知っていた。俊也の知らなかった、雨に濡れる神秘的で美しい景色を愛していた。

今なら分かる気がする。

ずぶ濡れになって、自分と同じようにずぶ濡れの景色を眺めて、歩くたびにはねる雨を楽しむ。まるで違う世界に入り込んだような気分になる。

どのくらい歩いただろうか。まだ肌寒いなか雨に濡れたせいで体の芯まで冷え込み、俊也は身震いをした。

かなり歩いた気がする。二人で話すでもなく、ただ並んで歩いて全身で雨を感じながら。

「おい、もうそろそろ帰るぞ。このままじゃ風邪引く」

自宅の近くの小さな公園の前に着いた辺りで、俊也は春菜に声をかけた。

「うん、そうだね」

存分に雨に濡れて満足したのか、案外素直に春菜は俊也に従い、にこりと笑った。けれど彼女は突然足を止め、雨の降る空を見上げたまま身じろぎもせずその場に佇んだ。

「春菜？」

彼女より一歩先に歩いていた俊也が、春菜の様子に気付き振り返

った。

俊也から少し離れた場所で春菜はじつと空を見上げていて、俊也の呼びかけも聞こえないようだ。

「春菜、どうした？」

さっきまであんなに楽しそうに笑っていたのに、今の春菜から笑顔が消えている。なんだか心配になり俊也が春菜に近寄った瞬間、春菜の目から涙がこぼれた。

「?!」

見間違いかもしれない。雨が目に入り、それが春菜の頬を伝っただけかもしれない。俊也はそう思ってみたが、それは違うようだ。確かに春菜は今、暗く、厚く空に敷き詰められた雨雲を見つめ、静かに泣いている。

春菜の目からは次々に涙が零れ落ち、そして雨に溶けて消えた。なぜ泣いているのか俊也には分かりようがない。さっきまではしゃいで笑っていたのに、急に泣き出されても理由が分かるはずがない。

空から降る雨のように絶え間なく春菜も涙をこぼし、ただじつと空を見つめたまま動こうとはしない。

この子は、今ここで泣き始めたのだろうか。

ふと俊也はそんなことを考えた。

本当は、ずっと前から泣いていたのかもしれない。流れ落ちる涙はすぐ雨に溶けて消えてしまう。だから気付かなかっただけなのではないだろうか。

この少女は、笑いながら泣いていたのではないだろうか。

なぜだかは分からない。俊也に知る由もない。

でも嬉しそうに笑いながら泣いていたのだとすれば、それほど悲しいものはない。

「……っ!」

急に胸が締め付けられるような気分になり、俊也は思わず春菜を抱きしめた。

驚くほど彼女の体は細く、とても冷たい。胸の中にいるのに、まるで近くにいる気がしない。

もしこの子を放したら、きっと彼女自身も雨に溶けて消えてしまう。そんな気がして、俊也は恐ろしくなった。

絶対放してはいけない。その思いで俊也の春菜を抱きしめる腕に力が入る。

トードーさん…

春菜の声が聞こえた。いや、実際聞こえたのではない。彼女の声、俊也は感じた。

彼女が俊也を呼んだのかは分からない。ただ彼女がそう呼ぶのを感じたのだ。

その声のようなものは、実際に空気中に響いたのかはどうか分からない。けれどその微かなものは雨音に負けることなく俊也の心に残り、何度も俊也の名前を呼ぶ。

放してはいけない。

この小さな少女を放してはいけない。

その思いでいっぱいになった。

俊也の気持ちを知っているのかいないのか、ざあざあとしきりに雨は二人を濡らしていく。

雨の降りしきる中、二人は寒さも忘れて佇んでいた。

響く笑い声

白い湯気がもくもくと四角い小さな部屋を満たしていく。

腕を動かせばミルク色の温かい液体が音を立て、その音は狭い空間の中で妙に響いてそして消えていく。

その音が耳に心地よく、わざと音を立てて響かせてみる。

ぴちゃぴちゃ…

春菜は入浴剤入りのお湯がためてある浴槽の中で、お湯のはねる音を耳にすると満足げににっこりと微笑んだ。

雨に濡れて冷え切った体は既に温まり、白い肌は熱のせいで薄い桜色に染まっている。

春菜はのぼせそうな頭を浴槽のふちに預けて天井を見上げ、ふう、と息を吐いた。

「3、4、5…」

この浴槽に初めて入った日からどのくらい経っただろうとふと思いい、指を折って数えてみようと思いたが、のぼせる寸前の頭でまともに数えられず春菜は途中で数えるのをやめた。

もともとそんな細かいことは気にしない質だ。大体一ヶ月弱くらいだろうと結論づけ、そのことについて考えることをやめることにした。その代わりこの家に来てからの日数ではなく、この家に住む俊也のことを考えることにした。

俊也は優しい。

彼は何も聞かないでいてくれる。

春菜が家に帰らないことも、春菜の個人的なことも。

今日のこと、彼は何も聞かなかった。何も言わずに抱きしめてくれた。

雨に濡れて彼の体も冷え切っていて冷たかったはずなのに、なぜか彼の腕の中は温かった。まるで、このミルク色の液体のように春菜は細くて小さい両手でお湯をすくった。

白くにこったその液体の表面を覗き込んでみると、そこには微かに春菜の顔を映し出されていた。

ぴちゃぴちゃ…

細い指の間からお湯は流れ落ち、音を立てながら元いた場所に戻っていく。

しばらく浴槽のお湯の中でゆっくりとくつろいでいると、浴室の向こうから小さく足音が聞こえてきた。そして、浴室の外から俊也が春菜に話しかけてきた。

「春菜、飯出来たぞ。いつまで入ってんだ？」

「……」

何事もなかったかのような俊也の声。

彼からは何も聞いてはこない。

もし聞いてきたとしても、春菜が言葉を濁せばそれ以上聞いてこない。

俊也は優しい。

春菜はここからでは姿が見えない俊也の方向に向かってにつこりと笑った。

「おい、春菜！お前死んでないだろうな？！」

春菜が返事をしなかったことで不安になったらしく、俊也の焦ったような声が届いて春菜は噴き出した。

「あはは、大丈夫。倒れてないよ！」

春菜の声が浴室全体に響き渡った。

「なんだよ、心配かけるな！」

ほっとしたような、怒ったような俊也の声。

彼は春菜が風呂に入るとよく声をかけてくる。きっと春菜が初めて来た日に風呂場で倒れたから心配なのだろう。

そういえば、俊也はまだ風呂に入っていない。体も冷えているはずなのに春菜に先に風呂を使わせて、俊也は体を拭いただけだ。

そろそろあがらなければ俊也が風邪を引いてしまう。

「ごめんねトードーさん、今あがるから」

浴室の向こうの俊也に声をかけ、春菜はいたずらっぽくにやりと笑みをこぼした。

「それとも一緒に入る??」

「ばっ…！ばか言つてないでさっさとあがって来い！！」

慌てた俊也の声が返ってきて、春菜はけらけらと笑った。笑い声が狭い空間の中で跳ね返り、こもった響き方をする。

「……」

風呂場で響いた自分の声が妙に耳に残り、春菜は自分の声の余韻に耳を済ませた。

身動きをとらなければ浴槽の中は静かだ。たまに水が滴る音が響き、そして消えていく。それだけだ。

ほぼ無音の中で、春菜は自分の発した声をしばらく聞いていた。実際聞こえていなくても、笑い声は耳に残って離れない。

けらけらと、何の不安もなさそうで楽しそうな笑い声。

こんな声が自分から出たのかと一瞬信じられなくなるが、自分以外の声なわけではない。

こんな風に私は笑うのか。

そう、思った。

拒食

春菜が長い髪を乾かしている間に俊也も早々に風呂に入り、二人は夕食をとることにした。

普段春菜は食べる速度が恐ろしく遅いうえに、殆ど食べようとはしない。そしてそれは今日も例外ではなかった。

俊也は春菜がもう手をつけようとはしない食事の器に目をやった。そこにはほとんど手付かずのまま食べ物がのっけていて、その光景は多少俊也を落胆させた。

彼女は普段からほとんどものを口にしようとはしない。最低限食べると、まるで食べ物を拒絶するように食事をやめてしまい、それ以上食べることはまずない。

せつかく作ったものを粗末にされるのは気分のいいものではないが、俊也はまるで気にしていないかのように振る舞うことに決めていた。

春菜が俊也の家を出入りするようになった当初はなんとか食べるよう説得を試みていたが、ある日を境に俊也はそれをやめた。

「ごちそうさま…」

不意にあの日の春菜の声が俊也の耳に甦る。

「ごちそうさまも何も、お前ちよつとでも食ったのかそれ？」

続いて自分の呆れたような声も頭の中で響き、次第にあの日の記憶が鮮明に俊也の目の前に広がった。

テーブルには食べる前とさほど変わらない俊也の作った料理が残

されていた。

料理の腕には少し自信があるし、実際自分で食べてみておいしいから味が原因だとも思えない。なのに春菜は毎日夕食を殆ど残してしまう。

やせすぎてガリガリな春菜の体を見て心配にならないはずがなく、俊也は少しでも春菜が食べる量を増やしたい気持ちでいた。

全く食べようとしない春菜を無言で責めるように見つめていると、彼女はごまかすように舌を出してわざとらしく笑った。

「えへ」

「えへじゃねえよ。いつもろくに食べないで、お前死ぬ気か？」

「別に死ぬ気はないんだけどな」

そう言ったものの、春菜はもう何も口にしたくないのか自分の残した夕飯に目を向けないように視線を宙に泳がせた。

春菜がろくに物を食べる姿を俊也は見ることがない。何回か箸を口に運んだらすぐにやめてしまう。こんなことをしていたら倒れるはずだと、道端に倒れた春菜の姿を思い出して俊也は妙に納得した。

「じゃあ好き嫌いが激しいのか、もしくはダイエットか？」

「そういうわけじゃなくて」

もどかしそうに春菜は眉をひそめた。

「食べるって行為が既に嫌いなんだもん」

またか、と俊也は肩を落とした。

春菜は常に食べるということが嫌いだと主張しているが、俊也にはその言葉の意味が理解できない。

「食べることに好きも嫌いもないだろ。食べなきゃ腹は減るし、腹が減ったら食べるってだけのことじゃないか」

「そりゃあそうなんだけど…」

珍しく春菜は言葉を濁した。いつもは都合の悪いことを指摘されても訳の分からない理屈で押し通したり、笑ってごまかしたりするのに、どうしたことが今日は歯切れが悪い。

そんな反応をされてしまうとまるでこちらが悪いことをした気分

になるが、だからといってこのまま放っておくことも出来なかった。春菜の体はびっくりするほど細くて、風が吹いただけでも崩れるのではないかと思うほどだ。こんな体で、放っておくことが出来るわけがない。

どうするべきか考えながら、俊也は何気なく春菜に言葉をかけた。「お前小学生の時給食食べ切れなくて昼休みの時間も給食食べさせられたタイプだろ」

「ん？うーん…」

きょとんと首をかしげた後、春菜はまるで遠い昔を思い出すかのように眉間にしわを寄せ、腕を組んで唸りながら目を閉じた。春菜の年ならそんなに思い出すのに苦労はしないだろうに、そんな春菜の様子がおかしくて俊也は思わず苦笑する。

しばらく唸ると春菜は目を開けて、手をひらひらと振った。

「いや、そういうわけでもない」

「ちゃんと食べてたのか？」

「うん」

意外な返答に俊也は目を丸くした。てっきり春菜の拒食は小さい頃からのものかと思っていたのだが、それは違っらしい。

「その時は食べることが嫌いじゃなかったのか」

「…うん」

春菜は居心地悪そうに頷いた。彼女は彼女自信について話したがらないようで、質問されるといつもよそよそしくなる癖がある。しかし俊也はあまりにも意外な事実に驚いたせいか春菜の様子に気付かず更に質問をした。

「じゃあいつから食べるのが嫌いになったんだ？」

「えーっと、」

幼い頃からの記憶を手繰り寄せるように彼女はしばらく視線を泳がせ、それから急に自分の残した食べ物の中のた器を凝視した。俊也の質問に対する答えを見つけたようだ。けれど春菜は口を開こうとはせず、しばらく一点を凝視したと思ったら不意に俊也に顔を向

けた。

そして、何も言わずににつこりと笑った。

春菜の笑顔を見て、俊也は密かに落胆した。

彼女と何回かやり取りをしていて分かったことがある。そのうちの一つが、この笑顔だ。何かを質問した後に返事もせずにつこりと笑うのは、返答を拒否する意思表示らしい。この笑顔を見せた後は何を聞いても答えないし、はぐらかされるのがおちだ。だから俊也はそれ以上聞くことを諦めざるを得なかった。

「とにかく、あと少しでいいから食べるよ。ちよつとだけでいいから」

「いゃん」

全く食べる気がないのか春菜はわざとらしく体をくねらせておかしなポーズをとった。

「いゃんじゃねーよ気持ちわりーな」

「ひどいわっ！現役女子高生に対して気持ち悪いだなんて！」

そう言うとは今度はオーバーにショックを受けたりアクションをとる。

「いちいち疲れる奴だな！よし、じゃあこつしよう。お前が今日もうちよつと食べたら一つだけ何でも言うこと聞いてやる。どうだ？」

「…なんでもいいの？」

「極端な要求じゃなけりゃな」

俊也の提案に少し食いついたようだ。春菜は食べるか否か葛藤しているらしく、うーん、と唸りながら何度も首を傾げてテーブルの上の器とにらめっこし、それからいぶかしげに俊也の顔をまじまじと見つめた。

「どうしても食べなきゃだめ？」

「どうしてもってわけじゃないけど…」

無理やり食べさせることに抵抗も感じるが、心配になのだから仕方がない。

「もつ少し自分を大切にしろ？」

春菜が食べないでいるその行為が、自虐的な行為に見えてしまう。自分で自分を追い込んでいる気がしてならない。俊也の真剣な顔を見て、春菜は諦めたようににこりと笑って箸を手に取った。

「しょーがない！ちよつとだけ食べますか」

箸を握り締め、春菜は覚悟を決めているのか息を吐いた。食べることにそんなに覚悟があるのだろうか。

まるで獣と対峙するかのような春菜の様子は尋常ではない。顔から表情を消し、背筋を伸ばし、神妙な面持ちでテーブルの上の食べ物に箸をもった手を伸ばす春菜からは緊張感さえ感じる。ただ食べる、それだけのことなのに。

なんだか急に俊也は嫌な予感を覚えた。なぜだかは分からない。さっきまで食べさせたい一心だったのにもかかわらず、今は春菜を止めなければいけない気さえした。

「…無理しなくてもいいぞ？」

何を言ってるんだ。俊也は自分自身に呆れた。

食べると言ったり無理すると言ったり。言っていることが無茶苦茶だ。

けれど春菜は無理やり笑顔を作って俊也を見やった後、食べ物に運んだ。ゆっくりと噛み、飲み込む。

「うん、おいしい」

がちがちの笑顔でそう言い、続いて何回か口に運ぶ。

人が食べるところをただ見るだけなのに、なんでこんなに緊張するのだろう。不安が、そろりと俊也の背筋を這いあがる。

そして、悪い予感はあるが間違いではなかった。

「っ！」

数口食べた後、春菜は両手で口を押さえた。

「春菜?!」

返事もせずに春菜は立ち上がり、口を押さえたままリビングを飛び出した。

慌てて春菜を追いかけると、トイレに飛び込み便器の前に膝をつ

いて激しく嘔吐し始める春菜を見つけた。

とても悲惨な光景だった。

もともと食べた量自体は少ないのですぐに胃の中は空っぽになり、あまり大量に嘔吐することはなかった。けれど食べたものを全部吐き出しても吐き気はおさまらないらしく、絶えず胃液だけが出てきた。

まるで死人のように春菜の顔色は真っ青で、眉間に皺を寄せ、苦しいせいか顔には脂汗が浮いている。

少し落ち着いたかと思うと、もう何も出すものはないのにまた吐き気が襲い、その繰り返しで春菜を長い間苦しめた。

吐き気がおさまるまで俊也は春菜の背中をさすってやることしか出来なかった。

どのくらいそうしていただろう、やっと吐き気がおさまった頃には春菜はぐったりとその場に座り込み、トイレの壁に身を預けた。

手は力なくだらりと投げ出され、長い髪は汗でびっしょりの顔に張り付き、トイレの壁の方に向いている春菜の目は焦点が合っていない。このまま死んでしまうのではないかと不安になるほど春菜から生氣を感じなかった。

俊也はタオルを持ってくると、春菜の汗や汚れた口元を拭いてやりながら、ごめんな、と謝った。

こんなことになるとは思わなかった。こんなに苦しめたいわけではなかった。

けれど結果的に春菜を苦しめてしまった。

人にはいろんな事情がある。心の中には周りの人が思いつかないほどの闇が存在する。それを知っている気でいたが、俊也は実際分かっただけではなかった。

春菜だって、ただのわがままで食べることを拒否していたわけではない。いつも笑顔でいるから気付かなかったが、彼女には彼女なりの事情があり、拒食にもそれなりに理由があるのだ。

それを、俊也は気付けなかった。それが申し訳なくて仕方がない。

「ほんとに、ごめん…」

今は謝る以外にかけ言葉が見当たらず、何度も何度も俊也は謝った。すると不意に春菜の唇が微かに動き、ぼそと何か呟いたが、あまりにも小さな声で俊也は聞き取ることが出来なかった。

「ん、なんだ？」

「…できない」

「……」

「食べることが、できないの。…どんなに、おなかが空いてても、おいしそうだと思っても…食べることが、できない」

ぼそぼそと呟く、かろうじて聞こえるくらいの小さな春菜の声が、まるで悲痛な叫びのように聞こえた。

「なんでなの、わからない…。食べようとしても、全部吐いちゃうの」

俊也は手を伸ばし、春菜の頭を優しく撫でた。何をするべきかわからなかった。

目の前に苦しむ女の子がいるのに、俊也はその苦しみを取り除いてやる術を何も持ち合わせてはいない。それがもどかしく、ただ頭を撫でてやることしかできないことが腹立たしい。

「もう、無理に食べるなんて言わない。無理に食べることはないから…だから…」

春菜はゆっくりと頭を動かし、俊也を弱々しく目を向けた。

「だから、もうそんな辛い顔するな」

こくりとかすかに頷き、春菜は弱々しいながらも笑顔に浮かべた。

俊也はあの日から春菜が食べなくても咎めることをやめた。けれど、残されることはわかっていても春菜の分の食事を作るのをやめたりはしなかった。いつかでも食べれるようになったときに食べれるように、毎日春菜の分の食事を用意することになっていた。

「ごちそうさま！」

春菜は雨の中涙を流したことなんて忘れてしまったかのように元気に振舞い、そそくさと食器を片付け始めた。

ものを食べれないのがなぜだかは春菜自身にもわからないように、今日泣いていたのも彼女はなぜだかわからないのかもしれない、と俊也は思った。人の行動にはたいてい理由が存在するが、全部が全部理由を把握しているとは限らない。

きつと春菜のあの笑顔の奥に、俊也には計り知れない何か潜んでいて、それをむやみやたらに引きずり出してはいけないのだ。下手にどうにかしようとすれば、恐らくそれは俊也ではなく、春菜自身に牙を向いてしまう。

今はただ、一緒にいてやることだけだ。

春菜が自分自身を大切に出来ないのなら、俊也が大切にすることがない。

俊也は皿洗いをする春菜の細くて小さな背中を眺め、一人頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8988b/>

あめ

2010年11月9日15時37分発行